
残ったコーン

藤井 和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残ったコーン

【Nコード】

N2524BA

【作者名】

藤井 和葉

【あらすじ】

ちよっとした小話。切ないのが書きたかつんだけど。

ピツと聞き慣れた音を通り過ぎてホームへ向かう。

「やっぱりさむい」

会社から出たときは行けるかと思った。が、だめかもしれない。やれ温暖化だの異常気象だの言われていたのはどこへやら、いきなり冬らしくなってもうマフラーと手袋は手放せない。はずなのに。

「さむいさむいさむい」

痒いような刺さる冷たさが手を覆い、いつもは大好きなはずの白い息もここではなんの役にも立たずじれったささえ感じる。暗いホームにぼつんと、終電間際の時間帯。こんな状況も慣れてしまったけれど。そんなことより今はこの冷たさをどう回避するかだ。

はた、と目に入る光。

「すいませーん、お昼行つてきますー!」

話し声に怒鳴り声、ひそひそ声と紙の音、機械音などが入り混じる部屋の奥に声をとばす。

返事は、ない。

「…え、」

なんだなんだ、いつも大声で返事をしてくるあの陽気な部長はどこへ行った。

ねえ藤井さん、と同期の事務の顔の前で手をひらひら振ってみる。くるりと椅子を回してパソコンから目を離れた彼女の顔を見て驚く。「ちよ、なに徹夜だったの?」

いつも綺麗な顔はぱんぱんに腫れ、くまができている。しかしどことなく幸せそうな表情。

「、まあね」

少しどもったように返ってきた返事。

「無理しちゃだめよ、」

そんなこと言われなくても彼女はわかっている。お互い苦笑いしたあと話をすり替える。

「あ、で、今日部長どうしたの？返事返ってこなかったからちよつとびっくりしたんだけど」

少し、間があいた。

「…あー、部長ね、なんか取引先の会議だつて言つてたけど。今日はまる一日いないみたいよ」

「ふうん」

部長がいないここは初めてかもしれない。ずしんと奥の机で構えて声が大いからいつも聞こえていたのに。

「そつかそつか、ありがと。じゃあ私お昼食べてくるね」

「いつてらっしやい」

にこりと笑つて、手を振りながら部屋を出る。彼女の顔はよく見えなかった。

…定食屋もラーメンも、行きたいところが全部満席つてどういふことなの。畜生。いやしかしこの天ぷら美味しいな。つるつるとうどんをすすりながら思う。あー仕事めんどくさい。

「ごちそうさまでしたー」

お金を払って店を出ようとする。

「あ、」

同じように店を出る同僚が見えた。でもさつきとは違い私服。

「藤井さん！」

彼女もこちらに気づいたようで手を振り、少し高めのヒールを鳴ら

し駆け寄ってくる。

「藤井さん今日は午前だけなの？」

彼女が口を開くまえに尋ねてみる。

そんなことも気にせずと答える彼女の表情はさっきと同じような雰囲気になった。

「そうなの。」

綺麗に着飾って化粧もバツチリ。どこかにお出かけのよう。

「いいなー、これからデートでも行くの？」茶化すように聞くと照れたように頬を赤くさせ満面の笑みをこちらに向ける。

「ないしょ」

はい確定。

「楽しんできてくださいな」

笑い混じりに言い、彼女は微笑みながら手をこする。よくみるとその手は真つ赤で。

「…、はい」

持っていた手袋を彼女に差し出すとキョトンとした顔でこちらを見ていた。

「寒そうだし使って？」

え、と言葉を漏らす。

「いや、悪いよ」

「いやいやいや、だって藤井さんマフラーもしてないしこれからデートなら風邪引いちゃダメでしょ」

ね？と言うと少しはにかんで受け取ってくれた。

「ありがとう」

もう彼女は時間がないらしくそのまま別れ、会社に戻った。

その光の先には黄色いラベルの缶。

「うわーうわーいつのまにあったい飲み物売ってたの」

これなら、と思い鞆に手を入れ財布を取り出す。

ガタン

しばらくは開けずに握った、じんわりと手が感覚を取り戻す。

「うまー」

久しぶりに飲んだ気がする。なかなか自動販売機を利用しないものでね。美味しくて、温かさがしみて、いつのまにか飲み終わっていた。

でも、

「コーン残ってる…」

このコーンたちは反抗期なの？え？

ぶつぶつと呟く。すると階段のほうから大きな声とヒールの音。お、と思い振り向くとやはり。これは声をかけるべきなのかと少し近寄るがあることに気付く。

腕、組んでる？

は？

え、え、ちょっとまってまってまって

咄嗟に物陰に隠れるも心臓がばくばくいって落ち着かない。確認してみるのが、やはりどう見ても向こうにいるのは部長と藤井さん。

ちよつと待て落ち着けどういことだ。なんで二人が腕組んでんのえー。ていうか部長：部長あなた既婚者でしょうに…。半ば諦めモードに入りもう一度見る。

彼女は昼に渡した手袋をして、相手を見上げ微笑んでいる。相手も彼女の手を握り笑いながら何かを話している。

握っている缶が冷たい。

もうすぐ電車がくると放送が流れる。

私は物陰から二人を見つめたまま。

二人は私に気付かず抱き合いキスをした。顔を見合わせずごく、凄く幸せそうに笑う。

ああ、これは、

くるっと二人とは反対側にあるゴミ箱にむかう。

かたん、と、残ったコーンは一緒に、今日の記憶と一緒に、ゴミ箱に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524ba/>

残ったコーン

2012年1月6日14時47分発行